

公立世羅中央病院だより



変貌するウイルス性肝炎治療

公立世羅中央病院 院長 末廣 眞一

肝炎といえばアルコールによるものとウイルスによるものが日本人では多く見られます。ウイルス性肝炎のうち、A型肝炎ウイルスによるものは本邦では力キを食べて発症することがよく知られています。急性期を過ぎると自然治癒します。一方B型肝炎ウイルス性とC型肝炎ウイルスは感染力が弱く、感染者の血液や体液が直接体の中に入らないと感染を起こしにくいとされています。B型肝炎あるいはC型肝炎は急性期を過ぎて慢性化するか、あるいは感染をおこしても無症状のうちに慢性化しています。わが国では献血時のウイルスチェックと公衆衛生の徹底によりB型肝炎とC型肝炎の新たな発症者は減少しており、患者の90%が40歳以上と高齢化が進んでいます。ウイルス性肝炎の診療で厄介なのはウイルスによる肝細胞癌の発症です(図)。日本人では年間4万例の

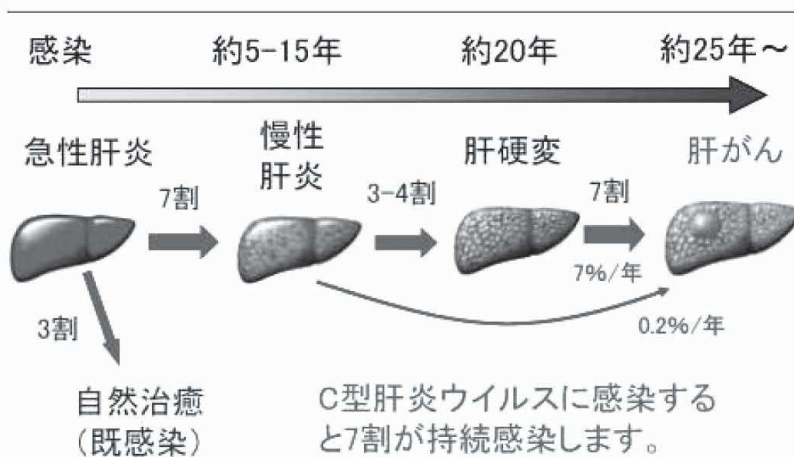
肝細胞癌が発症し、3万人以上が亡くなっています。そのうち75%がC型肝炎ウイルス、20%がB型肝炎ウイルスによる発症です。肝細胞癌の予防にはウイルスの排除が必要ですが、これまで長い間インターフェロンの注射が治療の中心でした。インターフェロンは半年から1年にわたり1週間に何回も注射のために病院を訪ねねばならず、また注射後に38度以上の高熱や体のあちこちに発疹が出たり、血小板が減少して出血傾向が現れたり、さらにはうつ病を発症したりと副作用が問題でした。それでも治療の成功率は50%前後と低く、新しい治療法が待ち望まれておりました。

このような状況の中で、つい5年前よりB型肝炎の内服治療薬が、昨年よりC型肝炎の内服治療薬が発売され、副作用もほとんどなく、治療率もほぼ100%という驚きの治療効果が得られております。B型肝炎の治療薬は肝機能が正常化したのちも服薬し続けねばならず、まだ問題が残っておりますが、C型肝炎の内服治療薬については3か月から半年内服すれば完治が得られ、病院とは縁が切れるという画期的なものです。この薬のおかげで数年のうちにはB型肝炎とC型肝炎は撲滅され、さらに肝細胞癌の発症も急速に減少すると見込まれています。

さてこの画期的な抗ウイルス薬ですが、問題は薬の値段です。B型肝炎については月額が3万円余りとリーズナブルなのですが、C型肝炎については完治するといえ、月額が200〜250万円の値段がついております。1錠が数万円もする超高価な薬なのです。国は補助金制度を設けてバックアップ

が得られております。B型肝炎の治療薬は肝機能が正常化したのちも服薬し続けねばならず、まだ問題が残っておりますが、C型肝炎の内服治療薬については3か月から半年内服すれば完治が得られ、病院とは縁が切れるという画期的なものです。この薬のおかげで数年のうちにはB型肝炎とC型肝炎は撲滅され、さらに肝細胞癌の発症も急速に減少すると見込まれています。

C型肝炎感染後の自然経過



C型肝炎ウイルスに感染すると7割が持続感染します。肝硬変まで進行すると7割に肝がんが発症します。